

# 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(3): —William Jamesは“The Principles of Psychology”において Langeの学説をどう受け止めたか?<sup>1)</sup>—

William James’s theory of emotion as a pioneer work  
of affective neuroscience, part 3  
—What was James’s initial response to Lange’s theory of emotion?—

佐藤俊彦\*

Toshihiko SATO

## 1. はじめに

筆者は、本学紀要に掲載された2編の拙論の中で、William Jamesの感情学説(James’s theory of emotion, JTE)を取り上げ、Jamesがこの学説を着想した背景を推論した(佐藤、2021a)とともに、Jamesの感情学説の初期のバージョン(James, 1884)の内容を整理し、その基本骨格および主たる論点が何であったかについて議論した(佐藤、2021b)。つまり、Jamesの感情学説が生まれる背景と、生まれたばかりの初期のバージョンについての議論であった。これらはいずれも、Jamesの感情学説の内容を正確に理解するための試みであった。

これらの議論に続いて、筆者が論じたいのは、Jamesの感情学説についての歴史的な変遷の過程である。歴史的な変遷過程を明らかにしておくことは、Jamesの感情学説を正確に理解する上で必須であると考えられる。この感情学説の理解のためには、この学説が、脳内メカニズムと感情の主観的体験の側面との相互関係(James, 1884, 1890他)や、顕著な身体反応を伴う粗大感情(coarser emotions; James, 1890)と、同様の反応をほとんど伴わない繊細感情(subtler emotions; James, 1890)の分類など、複数の要素が有機的に組み合わせられた多層的なものであり、この理論に含まれる、さまざまな構成要素が、時間経過とともに、どのように

変化したかを整理しておく必要がある。

そして、Jamesの感情学説の変遷過程を明らかにする作業に先立ち、Jamesと同時代の研究者であるLange(1885/1967)の学説がJamesの学説に与えた影響について議論しておく必要があるだろう。両者の感情学説は、“James-Lange説”という名称で並び称されることがあり、これまでは、そのことが理由で、二人の学説がきわめて類似した学説であるとの印象を与えてきたかもしれない。確かに、末梢の身体反応の役割を重視するという点において、両者の学説の間には類似点があった。だが、両者の学説を一括りに考えて良いのかどうか、“James-Lange説”という一括した名称がそもそも適切なのかという大前提の部分についても、きちんと議論を整理しておく必要があるように筆者には思われる。また、JamesとLangeのそれぞれの感情学説が、その後の感情心理学、および感情神経科学にどのように継承されて、その考え方が現代の科学にどのように生かされているかを把握しておくためにも、それぞれの学説の相違点を踏まえた議論が必要であると筆者は考える。

これらの課題のうち、本論では特に、Lange(1885/1967)の学説が、1890年の時点でのJamesの学説に与えた影響について検討したい<sup>2)</sup>。Lange(1885/1967)の学説が、Jamesの説に与えた影響

を考える材料として、本論では、1890年に刊行されたJamesの著書“The Principles of Psychology” (Figure 1に初版本の表紙を示す。以後、Principlesと記す)の第25章「感情」(The emotions)を参照しながら、Jamesがそれ以前にMind誌に発表した論文(James, 1884)との間で、内容の比較検討を行うことで、JamesがLangeの学説に出会ったことで受けた影響について考察を行いたい。Principlesは、心理学の教科書として企画され、出版された(Richardson, 2007)一方で、この感情の章に関しては、Jamesが章の冒頭のページ(p. 442)の脚注で述べている通り、Jamesが感情の脳内メカニズムなどについて論じた別な論文(James, 1884)の内容が、かなり多く含まれている(Table 1参照)。Jamesの1884年の論文が、最初の1884年バージョンであるとすれば、1890年の

Principles第25章は、それに次ぐ1890年バージョンであると言えよう。Langeの学説の発表は、Langeの母国語であるデンマーク語での発表が1885年であり、Jamesも参照したと思われる、Kurellaによるドイツ語訳の発行が1887年であるため、Jamesの最初期のバージョンには影響を与えることはなかった一方で、1890年のPrinciples第25章には、Langeの学説からの顕著な影響を与えたことを読み取ることができる。Langeの学説がJames学説に与えた影響を議論するのに先立ち、Langeとその感情学説について、簡単に紹介しておきたい。

## 2. Carl Langeとその感情説の特徴

Carl Georg Lange (1834~1900)はデンマークの医学者であった。彼は1834年、デンマークのVordingborgに生まれ、コペンハーゲン大学で医学を学んで1859年に学位を取得した後、1877年に同大学の教授に就任し、1900年に亡くなるまで同大学の教授職にあった(Dunlap, 1922/1967)。William Jamesとほぼ同じ時期に、感情に関する学説(Lange, 1885/1967)を提唱したことで知られている<sup>3)</sup>。Langeの論文の原題はデンマーク語で“Om Sindsbevægelser. Et psycho-fysiologisk studie”であり、原語のモノグラフは90ページにわたるものであった(Livingston, 2019)。Langeの感情学説は、両者の間の類似性のために、James-Lange説と呼ばれることがある(Schultz, 1975)ものの、両者の間の感情学説には、それぞれに異なる特徴があり、際立った相違点があったことにも留意すべきだろう。

まず、両者の類似性についてであるが、Lange (1885/1967)は次のように述べている<sup>4)</sup>。“Take away the bodily symptoms from a frightened individual; let his pulse beat calmly, his look be firm, his color normal, his movements quick and sure, his speech strong, his thoughts clear; and what remains of his fear?”(p. 66; 筆者による和訳: 恐怖におびえている人から身体的な変化をすべて取り去ってしまうとどうなるだろう。脈拍は通常通り穏やかで、外見上、落ち着いていて、顔色も普通であり、身体の動作も素早く正確で、発話も明瞭で、思考の働きも明確で混乱がないとしたら、その人のどこに恐怖の感情が生じているのだろうか?)

Jamesの感情学説に詳しい読者であれば、すでにお気づきであろうけれども、このLangeの文章表現からは、内容的に見て、James(1884)の次の記述にか

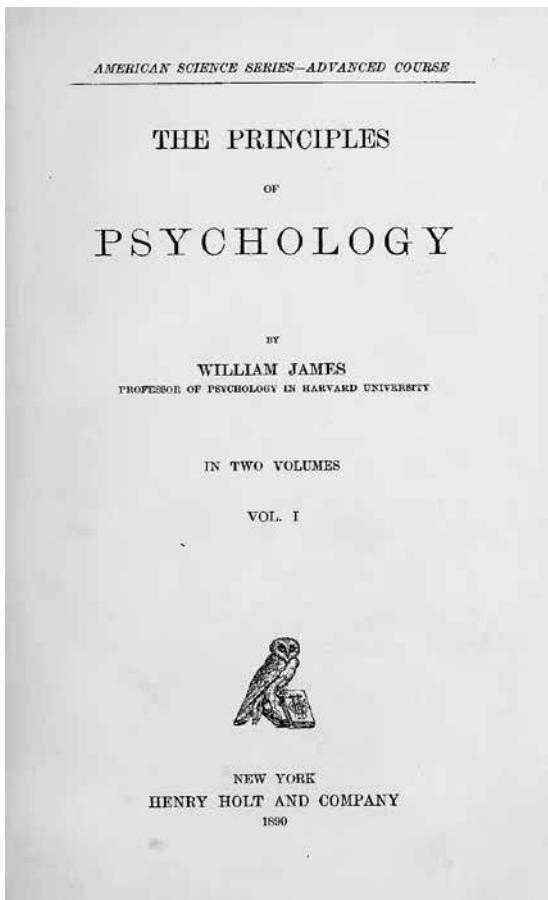


Figure 1 “The Principles of Psychology”(James, 1890)の初版本の表紙(第1巻; Wikipediaより引用(<https://en.wikipedia.org/>))

Table 1 “The Principles of Psychology”(James, 1890)の第25章「感情」(The emotions)における主要な議論の内容と該当部分のページ番号

主要な議論の内容	該当するページ番号
◎(1)本能 (instinct)と感情 (emotions)との関連(前章における本能に関する議論を受けて)	pp. 442-443
◎(2)感情の身体反応に関する具体的な説明(Lange(1885)による悲嘆、Darwin(1872)による恐怖、および、Mantegazza(1885)による憎悪に関する記述)	pp. 443-447
◎(3)感情の身体反応における個人差や多様性に関する議論、ならびに感情が生起する一般的なメカニズムを明らかにすることの重要性に関する指摘	pp. 447-449
(4)感情体験の成立過程に関する議論(粗大感情に限定)	
(A)感情体験の成立過程に関する仮説 (感情体験に対する身体反応の先行性と因果性)	pp. 449-450
(B)身体反応のさまざまな種類と感情体験に応じたパターン	p. 450
(C)さまざまな身体反応を素早く知覚できる	pp. 450-451
(D)身体変化の知覚なしに感情体験は生じない(身体変化の知覚が必須条件)	pp. 451-453
◎(E)感情をめぐる2種類の問題:感情表出の分類の問題と感情が生起するメカニズムの問題	pp. 453-454
◎(5)James学説を実験的に検証することの困難さ	pp. 454-456
(6)James学説への反論に対する議論	
○(A)第1の反論とそれに対する回答	pp. 456-462
◎(B)第2の反論とそれに対する回答	pp. 462-466
○(C)第3の反論とそれに対する回答	pp. 466-467
(7)繊細感情について	pp. 468-472
(8)感情体験を成立させる脳内機構についての議論(感情だけに特殊化された脳、すなわち「感情の座」は存在しない)	pp. 472-474
◎(9)感情の個人差(感情的性質と想像力の個人差)	pp. 474-477
◎(10)さまざまな感情の起源について	pp. 477-484
◎(11)結語(感情の分類について)	p. 485

◎: James(1890)で新規に追加された部分; ○: James(1884)の内容に一部が追加された部分;

無印: James(1884)とほぼ内容が一致する部分

なり類似しているという印象を受ける。“If we fancy some strong emotion, and then try to abstract from our consciousness of it all the feelings of its characteristic bodily symptoms, we find we have nothing left behind no ‘mind-stuff’ out of which the emotion can be constituted(後略)”(p. 193; 筆者による和訳: 強い感情が生じたときのことを思い浮かべて、そのときの意識から、身体的変化の知覚をすべて取り除こうとすれば、そこにはもはや感情体験を構成するような心の要素は存在しないことに気づく)。

他方、Langeの学説には、Jamesの考え方とは異なる要素も含まれていた。Langeの学説を概観すると、Jamesの学説(1884)に比べて、神経生理学的な考え方が占める割合が多く、James(1884)と異なり、心理学の内観法に基づく知見が含まれていない(Golightly, 1953; McTeer, 1953; Wassmann, 2010)。また、James(1884)が心臓の拍動、呼吸の速さ、および骨格筋の緊張の知覚を重視していたのに対して、Langeは、感情において血液循環の変化が果たす役割を特に重視しており、さらには、さまざまな感情反

応が表出されるメカニズムとして、脳幹部の血管運動中枢の活動を媒介していると考えていた (Izard, 1977; Wassmann, 2010)。この点について別な言い方をすれば、Izard (1977)も指摘しているように、Jamesが身体知覚を重視したのに対して、Langeは身体の状態の変化そのものを重視したと言えるかもしれない。それ以外の両者の学説の差異として、基本感情に関する考え方の違いを指摘する研究者 (Livingston, 2019) もいる。

Jamesは、このLangeの学説をどのタイミングで知ることになったのだろうか。Jamesは、Principles (1890)の中で、Lange (1885/1967)のモノグラフのドイツ語訳から、複数回にわたって引用しており、Principlesの刊行時にはすでにLangeのモノグラフの存在を知っていたと考えられる。このことに関連して、Principles刊行に先立ち、1887年に刊行されたKurellaによる

Langeの学説のドイツ語訳の存在を1888年には知っていた (Livingston, 2019)との指摘がある。

次節以後では、JamesはLangeの感情説をどう受容したのか、Principlesの内容に基づいて議論してみたい。

### 3. Langeの感情説がJames学説に与えた影響 (1): JamesによるLangeの記述の引用

Jamesは、Principlesの第25章<sup>5)</sup>の中で、複数の著作から引用を行い、その一部を自説の擁護のために援用している。Table 2には、第25章で引用された著者と内容を示す。なお、Table 2に示すのは、複数の文章を本文中で引用したものだけである。これに該当するのは、17件あり、そのうち5件がLangeである。引用数の多い順では、5回引用されたLangeが第1位であっ

Table 2 "The Principles of Psychology" (James, 1890)の第25章「感情」(The emotions)において引用された主要な著者と内容、および該当部分のページ番号

著者と発行年	主要な議論の内容	該当するページ番号
Lange (1885)	悲しみの感情に伴う身体的変化についての記述	pp. 443-444
Lange (1885)	悲しみの感情に伴う身体的変化についての記述(続き)	pp. 445-446
Darwin (1872)	恐怖の感情に伴う身体的変化についての記述	pp. 446-447
Mantegazza (1885)	憎しみの感情に伴う身体的変化についての記述	p. 447
Lange (1885)	感情に伴う身体的変化の多様性	p. 454
Lange (1885)	大きな音によって、連想や記憶などの心理機能を介さずに恐怖の感情が生じることの説明	p. 457
Bucke (1879)	強い恐怖の発作を経験した神経性の消化不良(nervous dyspepsia)の患者の症例	p. 460
Lange (1885)	激しい怒りの発作を経験した一過性躁病(transitory mania)の患者の症例	pp. 460-461
Henle (1876)	怪我や病気、飲酒による身体状態の変化によって感情が生起する事例の紹介	pp. 461-462
Bain (1859)	感情表出の促進・抑制と感情体験の強さとの関連性	p. 463
Burke (1757)	人相学者による表情の模倣と感情体験	p. 464
Archer (1888)	俳優たちが強い感情を表す役柄を演じたときの身体的変化	pp. 464-465
Sikorsky (1887)	特定の感情の表情に合わせて意図的に表情筋を収縮させても感情的な興奮は生じない	p. 465
Bain (1859)	感情を制御するためには抑制することが重要であること	p. 466
Spencer (1855)	恐怖や怒りに伴う身体的変化について	pp. 478-479
Darwin (1872)	啼泣反応の発達的变化について	p. 480
Mosso (1885)	危急場面における身体反応の有効性	pp. 483-484

※本文中にて、複数の文を含めて一定の長さで引用されたものに限る。

た。引用回数が2回で、順位としては第2位のBurkeやDarwinを大きく引き離している。

この第25章における、Langeの引用を特に注目すべきであると考えるのは、引用の回数が多いという理由だけではない。この章において、5回にわたるLangeの記述の引用が、章の構成上、きわめて重要な意味を持っていると思われる。まず、章の冒頭では、悲しみ、恐怖、憎しみの感情に伴う身体的変化について記述している。その中で、悲しみの感情に伴う身体的変化を説明するために、Langeの記述を引用している。つまり、章の最初の2～3ページ目(pp. 443-444)、および4～5ページ目(pp. 445-446)にかけて、Langeの記述を2回相次いで引用しており、章の最初の5ページを読んだ人にとっては、Jamesの記述とLangeの記述とが相半ばする印象を受けるだろう。この点だけでも、Langeの学説に対して、Jamesがかなり肯定的な評価をしていたのではないかと読者に思わせるのに十分であると考えられる。

次いで、Langeによる感情変化の多様性に関する記述が引用されている(p. 454)。この記述の中で、Langeは、喜び、恐れ、悲嘆といった同じ感情であっても、異なった身体的な変化が生じることを述べた上で、同一の原因から、異なった身体的変化が生じることを指摘している。実は、Jamesは、この引用に先立ち、心理学における感情研究のあり方について、非常に重要な提言をしている。つまり、感情の分類的研究に終始するのではなく、感情が生起する原因のメカニズムを探求すべきであることを、彼は主張している(pp. 453-454)。この主張は、5ページ前(p. 449)にも見られるので、JamesにとってはこのPrinciples第25章における重要な論点であったことが伺える。この論点は、1884年のMind誌の論文では述べられておらず、Principlesの第25章において新たに追加されたものであった。その新たな論点を主張するにあたって、補強材料として使われたのが、上述したようなLangeによる感情変化の多様性に関する記述であったと考えられる。

また、Principles第25章において、Jamesは自らの感情学説に対する3つの反論の紹介と、それぞれの反論に対する回答を述べている。Langeの記述が引用されているのは、その中の第一の反論である「感情に伴う覚醒や感情に関わる観念が生じるよりも先に、一定の知覚が生じて、その直接的な作用によって、広範囲にわたる身体的変化が生じるという考え方には根拠がない」という意見に対する応答においてである。James

は、自分が7歳から8歳くらいだった頃の幼少時の体験として、バケツにたまったウマの大量の血液を見て、驚きのあまり失神してしまったことなどを述べているとともに、大きな音によって、連想や記憶などの心理機能を介さずに恐怖の感情が生じることに関するLangeの記述を引用している。

Jamesは、この第一の反論に対して、さらに議論を進めて、特定の対象に向けられていない、いわば、自発的に生じたと考えられる病理的な症例を証拠として提示している。そのうちの 하나가、不定期に恐怖の発作を経験した神経性の消化不良に関してBuckeが報告した症例の記述であり、もう一つが、Langeが報告した一過性躁病の症例であった。これらの病理的な事例では、外的な対象からの作用が原因ではなく、内面的な知覚作用によって感情が生起していたとJamesは考えて、上述の第一の反論に対する証拠として提示したのだろう。

以上で述べてきたように、JamesのPrinciples第25章の中では、Jamesの主要な主張や反論の中でLangeの記述を引用し、自説の正当性を主張するために利用していた。さらに、次節では、Langeの感情学説が受けた影響について、別な観点から考察してみたい。

#### 4. Langeの感情説がJames学説に与えた影響(2): Jamesの学説はどう変わったか?

Langeの感情説がJamesの1890年時点の学説に与えた影響について、別な観点からも考えるために、もう一つ別な材料をここで提示しておこう。すなわち、1890年に出版されたPrinciples第25章では、1884年のMind誌の論文に比べて、出現頻度が増えた用語があったことを指摘したい。Principles第25章において、利用される頻度が増えた単語の一つが、“reflex(es)”(反射)である。Mind誌の論文(1884)では出現頻度が4回であったのに対して、Principles第25章では、9回であった<sup>6)</sup>。頻度が増加した理由として、JamesがPrinciplesで追加した「感情をめぐる2種類の問題」(感情表出の分類の問題と感情が生起するメカニズムの問題)を議論した段落(pp. 453-454)の中で、この“reflex(es)”が5回使用されている。なぜここで、「反射」という用語を繰り返し用いる必要があったのかと言えば、Jamesは、感情が生起するメカニズムを反射の作用によって説明しようとしていたようであり、また、「反射」の概念を利用することで、同一の感情であつ

ても、その感情の身体反応の内容が、状況によって異なっていたり、身体反応に個人差があったりする理由を説明しようとしたためであるようだ。この段落のすぐ後に続いているのが、Langeによる感情変化の多様性に関する記述(p. 454)であり、Jamesが反射のメカニズムを説明するためにLangeの記述を援用していたことが明らかである。Jamesは、1884年のMind誌の論文においても、感情のメカニズムを説明するのに反射の用語を用いている一方で、確証がないために断言はできないものの、このLangeの説明を読んだことで、Langeの記述を自らの議論の中で引用し、Principles第25章の記述の説明力を高めることに利用しようと考えたのではないだろうか。その意味では、JamesがPrinciples第25章で議論する内容の構成を考える上で、Langeのモノグラフの内容が、多かれ少なかれ、寄与していたものと考えられる。

次に確認しておきたいのが、Jamesは、Langeの学説をどう評価していたのかという点である。Jamesは、Langeのモノグラフの一部の記述を引用して、自説を擁護する議論に利用したものの、それだけでは、JamesがLangeの学説を全面的に支持していたという保証にはならない。そのため、Jamesが実際に、Langeの学説をどのように評価していたのかということ、PrinciplesなどのJamesの著作の原文に基づいて確認しておく必要があるだろう。そこで、次節では、Langeの学説に対するJamesの評価について議論する。

## 5. Langeの学説に対するJamesの評価(総論賛成・各論反対)

Principles第25章において、Jamesが、Langeの記述を繰り返し引用しているところを見るかぎりには、Langeの学説に対する評価は非常に高いのではないかとの印象を受ける。実際に、Jamesは、Langeの学説に関して、次のように述べている。“Now the general causes of the emotions are indubitably physiological. Prof. C. Lange, of Copenhagen, in the pamphlet from which I have already quoted, published in 1885 a physiological theory of their constitution and conditioning, which I had already broached the previous year in an article in Mind.”(p. 449; 筆者による和訳: 感情を生み出す原因は、まさしく生理学的なメカニズムによるものである。コペンハーゲンのLange教授は、私がこの論文の中ですでに引用したモノグラフの中で、1885年に感情の構成要素と生起条件に関する生理

学的な理論を提唱しており、これはまさに、私が昨年Mind誌の論文の中で提案した学説そのものにほからならない。)このように述べて、Jamesは、自分と同様の学説を提唱する研究者が、Jamesとほぼ同時期にデマークに現れたことを明言したのである。

だが、Jamesは、Langeの学説について、手放しで受け入れていたわけではなかったことにも留意したい。Jamesは、悲しみの身体反応に関するLangeの記述を2回引用した後に、“My impression is that Dr. Lange simplifies and universalizes the phenomena a little too much, and in particular that he very likely overdoes anæmia-business.”(p. 446; 下線は筆者が付した; 筆者による和訳: 私の印象では、Lange博士は、この現象について、いささか単純化、ならびに一般化しすぎているきらいがあるようだし、特に、血流低下に関連した問題に対しては、その傾向が顕著であるように思われる)と述べている。“anæmia”は、英語では“anemia”ないし“anaemia”とも書くようだが、日本語では「貧血」などと訳されており、ここでは、血流の低下を意味すると思われる。この記述に先立って、Jamesは、Langeのモノグラフより、“The anemia of the brain in grief is shown by ... (後略)”(James, 1890, p. 446)という、悲しみの感情に伴う脳の血流低下に関する記述を引用しており、こうした脳の血流低下の問題を、Langeが過剰に重視しすぎているとして問題視したのである。

実は、Jamesが、Langeの血管運動機能、ないし、血流の変化の役割を重視する立場を問題視する傾向は、後年になって、いっそう先鋭化したようである。Jamesが後になって、1894年に“Psychological Bulletin”誌上で発表した論文“Discussion: The physical basis of emotion”の中では、“(前略)Lange has laid far too great stress on the vaso-motor factor in his explanations (後略)”(James, 1894, p. 517; 下線は筆者が付した; 筆者による和訳: Lange氏は、(感情のメカニズムに関する)説明の中で、血管運動の要因をあまりにも強調しすぎている)と述べている。上記の引用部分と、先の引用部分にはそれぞれ、筆者が強調するために下線を付した部分があるが、この2つの下線部分を比較していただきたい。ごく些細な違いに思われる方もおられるかもしれないが、この4年間の間に、“a little too much”(James, 1890)と“far too great”(James, 1894)の違いが生じたのは、Langeの学説に対するJamesの評価が、時間経過とともに多少とも変わっていったのかもしれない。つまり、感情の身体反応とし

て、心臓の拍動や呼吸のリズム、骨格筋からの求心性作用を重視していたJamesにとっては、血流の変化を重視するLangeの考え方を必ずしも肯定的に評価していなかったのは間違いないだろうし、Langeの学説に出会った当初の、いわば、ハネムーン期を経て、4年後には当初からあった不満が先鋭化してきた可能性もあるだろう<sup>7)</sup>。

以上の議論をまとめると、Jamesは、少なくとも1890年のPrinciples刊行の時点では、Langeの学説に対して、概して、肯定的に評価していたと言えるだろう。自説を擁護してくれる存在とも考えて、Jamesは、Langeの学説の登場を大いに歓迎した様子がかうかえる。他方、血流の変化を重視するLangeの考え方には、批判的なコメントを加えており、その批判的な態度は、4年後の1894年にはいっそう強まっていたと考えられる。こうしたJamesの態度は、まさに「総論賛成、各論反対」といった表現に相応するものであって、Jamesの感情学説を正確に理解する上では、Langeの考え方すべてにJamesが賛同していたわけではないことに留意しておくべきだろう。

## 6. おわりに

本論における、ここまでの議論の中では、JamesがLangeの学説からどのような影響を受け、その学説に対してどのような反応を示したのかを、Principles第25章の内容に基づいて検討した。Jamesは、Langeのモノグラフから多くの記述を引用して、James自身の感情学説を擁護する材料として、Langeの記述を援用していた。「反射」の概念を用いた説明の文章が増えていることも、Langeの学説の影響であるかもしれない。また、Principles第25章の中では、James自身が、自説とLangeの学説との内容の類似性を認識していることが明確に述べられており、Jamesが、Langeを同じ学説の支持者、もしくは賛同者として扱っていたことがわかる。このようなLangeの学説に対するJamesの姿勢は、その後、“James-Lange説”という学説の名称で、両者の学説が一括して扱われる契機になった可能性があるだろう。

だが、JamesはLangeの学説に対して全面的に賛同していたわけではなかった。具体的には、Langeが血管運動機能と感情との関連を重視していることに不満を持っていたようである。そして、こうした批判的な傾向は、Principles発刊から4年後に発表された論文の中で、さらに顕著なものとなっていたようである。

本論では、1890年のPrinciples第25章の内容に基づいて、Jamesが、Langeの感情学説をどのように受け止め、反応したのかについて、上述のような議論を行った。今後は、このLangeの学説からの影響も踏まえながら、Jamesの感情学説が、1884年にMind誌に発表した論文から、1890年に刊行されたPrinciplesに至るまでの間に、どのような変遷をたどったのかという点についてを、別な機会に議論したいと考えている。

## 注

- 1) 本論文の内容は、北米神経科学会第50回大会(50th Annual meeting of Society for Neuroscience; 2021年11月9日にオンラインで発表)におけるポスター発表の内容の一部に加筆したものである。なお、本論の執筆にあたっては、JSPS科学研究費の助成を受けた(JP24530917, JP18K03182)。
- 2) 筆者は、いずれ別な機会にLangeの感情学説をより詳細に紹介し、Jamesの感情学説との異同について議論したいと考えており、本論での議論の中では、JamesがLangeの学説をどう受け止めたかを考察するために必要と思われる範囲にかぎって、両者の学説の異同を簡潔に指摘するに留めたい。
- 3) Langeの感情説が掲載されたモノグラフに関して、H. Kurellaの独語訳をもとに、Istar A. Hauptがモノグラフの全文を英訳したものが刊行されている(Lange, 1885/1967)。また、Benjamin Randが、同じくKurellaの独語訳に基づいて、モノグラフの一部を英訳しており、Langeの感情説の内容を最初に英語で紹介した(Lange, 1885/1966)とのことである。ただし、Hauptの訳文全体が58ページ(pp. 33-90)であり、注を除いた本文だけでも51ページ(pp. 33-83)に相当する一方で、Randが訳出しているのは11ページほどにすぎない(pp. 63-73)。Jamesが高く評価していた、Langeによる感情の身体反応の描写など、かなり多くの部分がRandの訳の中では割愛されていることに留意されたい。
- 4) このLangeの記述は、上述のRand(1912/1966)の部分訳にも収載されている。これは筆者の憶測にすぎないけれども、英語圏の研究者たちが、JamesとLangeの学説を、両者の学説の間には大きな相違があるにもかかわらず、一括して「James-Lange説」

ないし「感情の末梢起源説」などと一括して扱った理由に関して、このRandの部分訳には、Jamesの学説との共通部分が比較的多く含まれていた一方で、脳内のメカニズムのように、両者の見解が必ずしも一致しない部分は収載されていなかったことが関係していた可能性があるのではなかろうか。

- 5) 先にも述べたとおり、Principlesは教科書として執筆されたと考えられている一方で、第25章に関しては、自説への反論に対する論駁を行っており、彼自身が1884年に提唱した感情学説を補強し、説得力を高めるための目的を含めて執筆されたと考えて良いだろう。
- 6) Principles第25章 (James, 1890) において出現頻度が増えた用語は、もう一つある。“reverberate”、または“reverberation”(「反響する」または「反響(すること)」)は、1884年のMind誌 (James, 1884) では4回使用されているのに対して、Principles第25章においては9回使用されている。この用語は、身体反応の反響的な作用を表現するために利用されたと考えられる。ただし、Lange (1885/1967) の記述の引用との関係性は明確ではなく、この用語の使用が増えたのは、Langeの学説の影響であるとは考えにくい。また、Principles第25章において新たに導入された感情分類の用語である粗大感情 (coarser emotions) と繊細感情 (subtler emotions) についても、Langeの記述の引用との関係性は明確ではないため、この点についてもLangeの学説から影響を受けたことによるものとは考えにくいだろう。
- 7) Langeの学説に対する、Jamesの態度の変化の背景には、Wundtなどからの批判に応えるための必要に迫られていた部分があったとも考えられる。このWundtらの批判を受けたことによる影響については、別な機会に議論したい。

## 引用文献

- Dunlap, K. (1967). Editor's preface. In K. Dunlap (Ed.), *The emotions* (pp. 33-90). New York: Hafner Publishing Company. (Original work published 1922)
- Golightly, C. L. (1953). The James-Lange theory: A logical post-mortem. *Philosophy of Science*, 20(4), 286-299. doi:10.1086/287282
- Izard, C. E. (1977). *Human emotions*. New York: Plenum Press.
- James, W. (1884). What is an emotion? *Mind*, 9(34), 188-205. Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/2246769>
- James, W. (1890). *The principles of psychology* (Vols. 1-2). New York: Henry Holt and Company.
- James, W. (1894). Discussion: The physical basis of emotion. *Psychological Review*, 1(5), 516-529.
- Lange, C. G. (1966). The emotions (B. Rand, Trans.). In B. Rand (Ed.), *The classical psychologists : Selections illustrating psychology from Anaxagoras to Wundt* (pp. 63-73). Gloucester. (Original work published 1885)
- Lange, C. G. (1967). *The emotions* (I. A. Haupt, Trans.). In K. Dunlap (Ed.), *The emotions* (pp. 33-90). New York: Hafner Publishing Company. (Original work published 1885)
- Livingston, P. (2019). Lange vs James on emotion, passion, and the arts. *Royal Institute of Philosophy Supplement*, 85, 39-56. doi:10.1017/s135824611800067x
- McTeer, W. (1953). Observational definitions of emotion. *Psychological Review*, 60(3), 172-180. doi:10.1037/h0060455
- Richardson, R. D. (2006). *William James: In the maelstrom of American modernism*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- 佐藤 俊彦 (2021a). 感情神経科学と感情心理学の先駆としての James-Lange 説 (1): 「泣くから悲しい」という逆転の発想はどこから来たのか? 長野大学紀要, 43(1), 1-8.



佐藤 俊彦 (2021b). 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説 (2): Jamesの感情学説の原点である1884年の論文について. 長野大学紀要, 43(2), 35-45.

Schultz, D. (1975). *A history of modern psychology* (2nd ed.). New York: Academic Press.

Wassmann, C. (2010). Reflections on the “body loop”: Carl Georg Lange's theory of emotion. *Cognition and Emotion*, 24(6), 974-990. doi:10.1080/02699930903052744